所　報

No. 48

佐賀県教育センター
佐賀県佐賀郡大和町川上
TEL　0952－62－5211

もくじ

○　巻頭言「よりよい教育センターのあり方を求めて」……1
○　公開講座・講演概要「わたしの国語教室」（青木幹勇先生）……2
○　受講者の声と講座風景……4
○　受講者への提言（佐賀大学　新富康央助教授）……5
○　指導のチェックポイントー特別活動・中学校英語ー……6
○　ＣＡＩソフト作成について……9
○　昭和63年度長期研修生紹介……11
○　私のすすめる一冊の本……12

よりよい教育センターのあり方を求めて

佐賀県教育センター　次長　吉木　靖範

「教師の力量を高めるのに役立った」「教師自身の自覚に基づく研修として今後も必要だ」「宿泊して，情報や実践を交換できたのが良かった」等と受講者の声をよく耳にします。

皆さんに支えられて10年，教育センターはおかげさまで一歩一歩の歩みを続けてまいりました。そこには，佐賀県立教育研究所27年間と佐賀県理科教育センター17年間の伝統に支えられた土台があったことは言うまでもありません。

しかしながら，10年間というひとつの節目を迎えた教育センターとしては，設置目的に照らして，その歩みが充分であったかどうかを，冷静に見つめてみる必要があろうかと思います。

「教育センターの開所は，今日の教育界の渇望の場として，また，佐賀県教育の一層の振興を図るため極めて意義深く…」これは，当時の県教育長古藤浩氏（現，県出納長）のお言葉です。このお言葉を心として，私なりに，研修講座にしぼって考えてみたいと思います。

10年たった現在の受講者の声として，次のような要望があります。

「現場にすぐ生かすことのできる実践例を今後も盛りこんでほしい」「パソコン，音楽，中堅教員講座をふやしてほしい」「体育や技術・家庭，研究主任講座を新設してほしい」「生活科の講座も」そして，更に，「駐車場や食堂を広くしてほしい」等々…。

しかしながら，他方において，教育センターでしかできぬ研究・研修，教育センターだからできる研究・研修が当然あるわけです。現場の先生がたのニーズに教育センターとしてどう答えていくか，その接点を求めつつも，幾多の課題があるのが現状です。

「学歴社会から学習社会へ」と言われる昨今，教職生活35年だと仮定してみて，その時期にあった研修が大切のようです。これを校内研修と自主的研修に大別したとしても，その中身は，「基本となる研修」教育課程講習会等の「課題研修」「専門の研修」教員海外派遣等の「特別研修」といろいろあるようです。先生がたの中には，「これら定食型の研修，メニュー提供型の研修と共に，教師一人ひとりの自主的研修への援助を」との声もあることは充分承知しています。今後，このようなご要望は強まるのではないでしょうか。

教育センター開所１年前に，「昭和53年度幼・小・中・高別研修に関する調査」を実施し，研修講座を考える参考にしたことがありましたが，10年後の今，再び調査の必要がありそうです。

県内の先生がたに，「ますます喜ばれる教育センター」であるように，できることから着実に実現していく努力が私たちに大切だと考えます。今後共，教育センターを積極的にご利用されますよう心から期待いたします。

公開講座概要

わたしの国語教室

講師　青玄会主宰　　青木　幹勇 先生

「私の国語教室」という題をいただきましたが，私はこのことばが大好きです。一人の国語教師として生涯を国語教室にかけて来ました。毎日の授業を心行くまで楽しみ，充実させたいと思って授業探究をして来たつもりです。ところが，長い間には，たびたびの行き詰まりがありました。私は現在の筑波大学附属小学校に勤めていましたので，研究発表や授業参観など常にサービスをしなければなりませんでした。そのため，どうしても見せる授業が多くなり，いい発問をして，子どもに気の利いた発言をさせるような授業を工夫していました。そのうち，そのような発問応答によるにぎやかな授業でいいのかと真剣に悩むようになりました。本当にいい授業とはどんなものか，参観者が居ようが居まいが，本物の授業はこういうものだと言えるものを見い出して行こうと決心しました。

そのためには，まず発問を減らすことを考えました。発問というものはどうしてもできる子どもに片寄ります。教師が発問を振り回していると他方で落ちこぼれを出します。発問に追いたてられている子どもたちの身になってみなければなりません。発問は子どもにとって易しいものではありません。発問を否定することはできませんが，この発問に代わるものが必ずあるはずだと考えました。

次に，音読をもっと大事にして行くことに関心を寄せました。発問をつきつけ，細かく考えさせることが価値が高くて，授業のどこでも挿込める音読は価値が低いと思って見捨てているのではないかと気が付いたのです。この２つの事を本当に考え直して行けば，国語教室をもっと生き生きとしたものにすることができるのではないかと思いました。

昭和10年に芦田恵之助先生が国語教育易行道という本を書かれました。先生はそれまでに全国を行脚され，たくさんの授業をされています。そして，一番気になったのが子どもが読めないということでした。先生はそれを嘆いて，この本に特別のページを作り，皆読，皆書，皆綴，皆話をやらなくてはならないと檄を飛ばしていらっしゃいます。今でもやっぱり読めない子どもがいます。できる子どもだけが「はい，はい」とにぎやかに発言をしているような授業でないといい授業ではないと思っているのではないでしょうか。

子どもと汗まみれになり，どろんこまみれになる授業の中にこそ，いい授業があるのではないでしょうか。そのためには，ふだんの授業を大切にすることです。ふだんの授業を大切にすることによって，本当にいい授業というものが見えて来ます。そこから読めない子ども，書けない子ども，話せない子どもにも目が向けられていくのです。

ここで，好ましい普段の授業の条件を５つあげてみましょう。まず最初は全員が参加する授業です。これは発問応答でできるものではありません。発問応答は子どもの能力差をはっきりと枠づけてしまいます。その点，音読はこの枠を取り去り，全員を生き生きと活動させます。次は授業への集中ということです。集中のない学習は効果があがりません。

その次は充実感。子どもにも先生にも今日の授業は手応えがあったという授業です。そして，累積のある授業がいい授業だと思います。今日の学習が昨日の学習の上に積み重なり，明日の学習へとつながって行くような授業です。１年間，担任したらここが伸びたという累積が見えなければなりません。発問応答の授業は積み上がりがありません。最後は独自性です。先の条件の１～４は根や幹・葉を養う指導につながります。

最後の独自性は子どもが先生に見せてくれる花だと思います。例えば，読む力や書く力は国語の力の根や幹に当たります。それがしっかりしていて自分なりの読みとりが発揮できるのです。

音読指導から述べてみましょう。音読ではほとんどの先生が人物の心情を表すようなことを要求します。研究授業のためにそのような音読をさせようとするのです。そんな色気のある音読をさせても累積して行きません。もっとやるべきことがあるはずです。私は朗読家の幸田弘子さんと親しくお付合いをしているのですが，幸田さんのあの朗読は声色で気持ちを表すような音読でできているのではありません。朗読の土台である発声，発音がしっかりしているのです。これを今の音読指導ではおろそかにしています。声をしっかり出す。はっきり発音する。ゆっくり読む。そして，つまずかないことが大切です。

この基本的なことを鍛えていけば，子どもは幸田さんが築いた朗読と同じように，しっかりした自分の音読を発見して行くはずです。この音読指導は普段の授業の中でやれます。また，授業のどこにでもはめ込むことができます。そして，その子らしい音読を磨き上げていくことは，その子どもの人間性を育てることにも通じていると考えています。

次に，私が発問応答のとりこになっていた時，そこから脱却の道が開けたのが書くことでした。書くことはこれまで国語教室からのけものにされて来ました。国語教育の中で，初めて書くことを読むことの中に位置づけたのは芦田先生ではなかったでしょうか。「よむ」，「とく」，「よむ」，「かく」，「よむ」，「とく」，「よむ」。先生，創意のこの指導過程を作られ，書くことを真中に位置づけました。

私は芦田先生とは方向を変えて，第三の書くということを考えてみました。第一の書くは書写，第二の書くは作文です。しかし，どちらも読むこととは離れています。ましてや，聞くことや話すこととは無縁です。聞きながらメモする。メモをもとに話すのように，書くことは他の言語活動と一体化することができます。これが第三の書くです。読むことを支える書くことは，たくさんあります。視写，メモ，聴写，筆答，書きぬき，書き込み，書き足し，書きまとめ，意見・感想，図式など。しかし，私たちはこれをやって来ませんでした。それにはいくつかの理由があります。

第一の理由として，書く速さに大きな個人差のあることがあげられます。もう一つは慣れ書くことに対する心理的抵抗感です。多くの教師が書くことを授業に持込もうとしないのはこれがネックになるからです。いや，教師たちはさらに，書くことは，授業にとって非能率だ。書くことが学力につながるか。何を書かせるかわからない。最後に子どもは書くことが嫌いだ。などといって，書くことを敬遠し，拒否してきました。はたしてそうでしょうか。

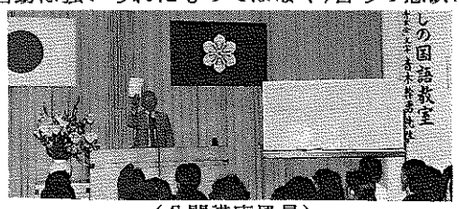
書く力によって，それぞれの学年の学習を支えるのですから，１年生は１年生としての書く学習がなされ，書く力が育てられなければなりません。そんなにむきにならなくても６年生くらいになれば，どの子も書けるようになるというような横着な声も聞かれますが，一部上位の子どもはとにかく，指導しなければ書けません。

もし，書けてもそれでは意味がないのです。上述したように，書く力は，それぞれの学年の学習を支える力でなければならないからです。

第三の書くは読むことだけでなく，聞くこと，話すこと，言語事項，作文，さらには書写の力を支えるものです。そして，その第三の書くを支えている土台が視写です。これによって，他の書くことを八方に広げることができます。視写を繰り返すことによって，書き慣れさせ，筆速を早めることができます。また，語句，文，文章，文法，表記を理解させ，音読や黙読では届かなかった読みをさせることができます。さらに，書いているうちに文章の書き方がわかり，作文の力を養うこともできます。

視写の指導を始めるには，最初に，先生が子どもといっしょに書くことが大切です。初めのうちは字が乱れますが，やかましく言わないようにします。速く書いて，一斉に終わることを目標にするのです。視写は全員が参加できます。集中します。そして視写の後は充実感がの残ります。その力は累積して行きます。

書き替えによって子どものオリジナリティを育てます。子どもに，かさこ地ぞうのおじいさんになっておばあさんとの会話を書かせます。子どもの人間性や生活が出て，その子の独自性が発揮されます。ごんぎつねは年中ぶつぶつ言っていますが，それを書かせます。ごんぎつねが動き回る所の地図を描かせます。「山にささげた一生」という伝記では感謝状を書かせます。感謝状を書くためには，全文を読み，どんなことをした人物であるか読みとり，主題をとらえなくてはなりません。書き替えの書くは読むことを一所懸命にしなくてはなりません。しかしこの活動は強いられたものではなく，自らの意欲によってなされるものです。まだいろいろな書く活動が考えられると思います。芦田先生が提唱された書くことを，私は，私の発想で授業に組織することを研究してきましたが，この授業体系の開拓は今後にのこされています。



（公開講座風景）

みなさんが，この書くことの授業世界を切り拓いて行ってほしいと思います。長い時間でしたが，一人も眠る人はいらっしゃいませんでした。これで，私の話を終わらせていただきます。

（文責　築　山　正　純）

研修講座

受講者の声と講座風景

研修講座は，先生方が積極的に参加していただき，最大限に研修効果をあげていただくよう，講義・研究発表・研究授業・演習・実験・野外研修など，幅広い，多様な方法で行っています。講座の内容も，現場の教育指導上の課題を踏まえたもので，先生方のアンケートで要望されているものを生かして行っています。これからも，より一層，創意工夫を加え，役に立つ，充実した研修講座になるよう努力していきたいと思っています。

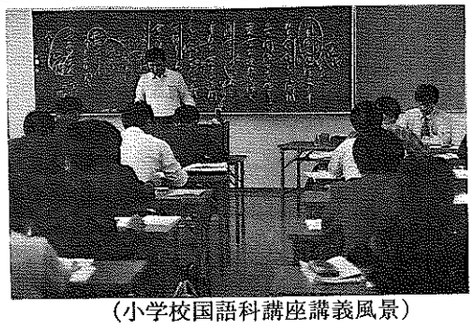
受講をされた多くの先生方の中から，4名の先生方に受講者として，感想を述べていただきました。また，講師としてお招きした佐賀大学の新富康央先生には，“受講者への提言”をお寄せいただきました。ご紹介いたします。

まず教師自身が……

基山小学校教諭　白浜　知寿

実践発表者が同期の先生だと知り，刺激を受けたくて申し込んだこの講座でしたが，その目的は十分果たせました。講師による実践報告，センター所員の先生の公開授業，佐大の先生の講義と，「見逃し聞き逃しはソン！」と言いたい程の中身の濃さでした。

子どもをよい書き手に，いいえ，よい書き手とまではいかなくても，筆不精ではなく何とか書ける，そういう人間にするには，まず教師がそうでなければ，と痛感します。言葉に敏感であること，自分の思いや考えを適切な言葉で表現できること，また，人間として輝いていること，これらが何より大事な気がします。今，四苦八苦しながらこれを書いている私は，よい書き手を育てるにはまだまだ修行が足りないようです。



（小学校国語科講座講義風景）

社会科講座に参加しての雑感

富士中学校教諭　橋本　博明

3日間の社会科講座に参加して感じたことを2つほど挙げてみたいと思います。

①昼食後，すぐに眠気がさした。これでは，私の5時間目の授業で生徒も眠気がさしているにちがいない。生徒の立場に立って初めて，自分の授業をふり返ることができた。

②外に出る巡検の楽しかったこと。

3日目は武雄地区の巡検で，現地に「神篭石」を見れたことは最大の収穫であった。夏休み等できるだけ現地をたずねるけど，実際に研究しておられる講師の説明を聞くと，一段と想像をかきたてられ，授業にふくらみが出て生徒を引き込むことができそうで，来年の古代史の授業が待ち遠しくなった。

（小・中合同社会科巡検風景）

私にとっての研修講座

佐賀東高等学校教諭　横尾　博見

教職生活も20年を過ぎると，生徒との間に大きな断絶を感じるようになってきました。

また，多様化した現在の生徒に対してどのように指導したらよいものか幾分自信を失いかけている時期でもありました。

このようなとき私は数学科（教材研究と指導法）講座を受け，以下の点でこの研修は大変良かったと思っています。

1. ただ教師が頑張ればよいというのではなく，授業の導入，実践，その後の結果をどうすべきか具体的に教えてもらったこと。
2. 頑張っておられる他校の先生たちと一緒になり，自分もやるぞと啓蒙されたことなど……とにかく授業や生徒に対して，これまでとは少し違った見方ができそうです。

個を生かす授業に喝。

白石中学校教諭　林　眞智子

パソコン中級・上級講座に計8日参加して，これからの授業の型がどのように変わろうとしているかがわかったような気がした。個を生かすといいながら40人の生徒のいる教室で何を基準にして焦点をあて授業をして来たのだろう。

九工大の大槻先生の講義が印象的だった。それは，個の能力や進度に合わせて作られた指導計画や指導方法がパソコンとの会話の中で進められていくのであった。今は設備やＣＡＩ開発の人材，時，場，それにチームワークの組み方など問題点は多い。しかし，1つ1つ丁寧に解決し進んでいくはずである。わかれば生徒たちは喜び，次への学習意欲は必ず増すのである。むら，むり，むだのない楽しい授業ができるパソコンの利用方法が示されたが，間もなくこのような形態の授業が可能となると確信したのであった。

（パソコン講座演習風景）

受講者への提言

原石にもどる

佐賀大学教育学部助教授　新富康央

「選手は誰も，公式戦ではダイヤのごとく輝かなければならないが，一年に一度原石にもどる必要がある。」旧南海ホークス門田選手のキャンプに臨んでの言葉である。せめて先生方が原石にもどるお手伝いができないだろうか。これが，私が教育センターの講義に際し，願っていることである。では，現場教師が原石にもどるとはどういうことであろうか。二つに大別して考えることができるのではないかと思う。

あるテレビ討論会の中で無着成恭氏は，盛んに「日本に教育はナカッタノ。」を繰り返していた。氏の言う「教育」が「教科の論理」に対する「教育の論理」を指し示しているとするならば，教育センターでお引き受けしている学級経営や生徒指導等の講座は，とりわけ存在感が大きいといわねばならない。教育現場ではともすれば，出来－不出来，あるいは特定の基準を百点としそれに何点追いついているかで子どもを見る。教科の論理に振り回されやすい。その結果，教師自身が子どもを切り捨てる側にまわっていたりはしていないだろうか。日本の学校教育を構成してきたものは，肥大化させられた教科の論理の部分であり，そこにはおとな社会の都合に一面的に子どもを従わせようとする力が働いている。「子どもの寸法に合った教育」あるいは「子どもから出発する教育」とは何か。教科の論理と教育の論理をどう組み立てるか。今日の教育論議はとどのつまりその点にあろう。

原石にもどることのもう一つの意味は，教育実践上の「常識」を疑ってみることである。例(1)－チリ一つない教室。それ自体はすばらしい活動のめあてだが，他面，それが子どもに本質的な活動性を抑圧したその結果であったということはなかったか。ましてや，ねらいがいかに高くても，罰を用意しての競争や連帯責任をとらせるしめつけなどで行われるならば，それは厳しさではなく，苛酷さ・冷酷さである。例(2)－周りにいつも子どもを集めている教師。それは教師みんなの願望かもしれない。だが他方で，それによって子ども相互の人間関係や活動が奪われてはいないだろうか。「子どもの目」から問い直せば，時には彼らのものは彼らに返してやらなければならないであろう。「果たしてそうだろうか。」「これでいいだろうか。」実践報告されている先生方に共通してみられるのは，日々の自らの実践の中で日常化された「常識」や教育界で長い間信じられてきた習慣化された「常識」に対し，こうした疑いを持ち，実践を深める態度であるといえる。

原石にもどる時，実践を引っ張ってくれるアイデアはこんこんと湧きでてくるのである。余りにほど遠いが，今年門田選手と同じく「不惑」を迎えた。豆腐づくりより納豆づくりを。見つめ－見つけ－見まもる。三つの目。一緒に話し合える先生方がいることがとにかく楽しい「不惑」の今日この頃である。

指導のチェックポイント

小学校特別活動

学級会活動の議題の集め方

1　問題の発見こそ議題誕生のもと

学級会の話し合いをするとき，議題が出てこない。子どもたちが自発的に問題を見つけようとしないなどと，嘆きをよく聞きます。議題が出ないということは，学級に問題がないということではなく，むしろ，子どもたちが自分たち自身で学級生活の向上をめざした実践活動ができるのだという習慣がついていないからではないだろうか。言いかえれば，いつも教師の指示ばかりが働いている学級ということになる。

問題の発見こそが議題誕生のもとである。自分たちで発見した問題を自分たちの力で解決したときにこそ，真の喜びや充実感が子どもたち自身のものになり，学級会活動のねらいが達せられていくと言える。

2　学級内の諸問題に気づかせる指導

学級会における話合いの議題は，本質的には，子どもたちが自分の学級における諸問題を自分たち自身の手で解決していくために選ばなければならないものである。ところが，最初から子どもたち一人ひとりが問題を発見する目を持っているわけではない。したがって，学級生活を向上発展させていくにはどんなことをすればよいのか，どんな議題を提案すればよいのか，気づかせる指導が必要となってくる。それは教師の助言と指導によって助成され完成されていくべきものである。そこで，学級内の諸問題に気づかせ，議題を集めるための身近な具体的な手立てを考えてみたい。

(1)　教師が与える「議題」

一年生に限らず，議題が子どもたちから出てこない学級では，学級会でどんなことを話し合うのかがわかるように，初めのうちは教師が議題を与えてやる。その際，二つか三つ程度の議題を示し，子どもたちがその中から選択して議題を決める手順をふませることは，自分たちで選んだ議題，自分たちの時間という自治的な活動へ意欲づける大切な指導である。

(2)　みんなが書く「議題」

毎週，曜日を決めて，朝や帰りの短い時間に，全員が議題用紙に学級会で話し合いたいことを何か一つは必ず書くようにしてみる。出された議題の中には，多種多様なものが見られ，学級会の議題としてはふさわしくないものも多いだろうが，それにこだわらず，まず，話し合いたいことは何でも書くことを続けさせてみることである。これを継続的にしていると，子どもたちが学級生活に対して改善や向上という目で関心を示すようになってくる。

(3)　教師も提案する「議題」

学級会の議題は，子どもが気づき提案するのを原則としているが，学級の実態に即して，先生も仲間の一員として議題を出してみよう。特に，子どもたちが気づかないもので，自治的に話し合うのが望ましいものがあるはずだ。それらを教師が提示していくことは大切なことである。

(4)　子どものつぶやきに耳を傾けた「議題」

休み時間や朝の会，帰りの会の子どもたちのつぶやきや報告の中から，子どもの日記やノートの中から，議題を拾い上げることができる。拾い上げた議題に対しては，学級生活に関する問題に気づいたことをほめ，大きく取り上げてやる。今後の活動の意欲づけになるし，どんなことを学級会で取り上げたらよいかが子どもたちにわかる。

(5)　議題ポストの工夫

多くの学級で見られるものに議題ポストがあるが，単に箱に口を開けたものが多いようである。この議題ポストを，子どもたちに親しまれている動物やマンガの主人公など，イラスト風に工夫してみよう。子どもたちの中にはそれを得意とする子がいるし，ポストのアイデアを募集することも学級会活動の一つになる。議題ポストが身近なものとなり，議題を考えポストに入れることが楽しくなってくる。

また，ポストの窓口をいくつかに分けてやることもよいことだ。例えば，小見出しをつけるように

（ア）　困っていることポスト
（イ）　友だちにしてあげたいことポスト
（ウ）　組のためになることポスト

などのように。こうすれば子どもたちが具体的に問題を発見しやすくなる。

(6)　学級会コーナーの設置

教室の後ろに，片すみにでもよいから，ぜひ学級会コーナーを設けてみよう。そして，どのような問題が学級会の議題としてふさわしいのかをこのコーナーに示しておいて，問題に気づかせるようにしたい。例えば，下の表に示すように。

問題を見つける目

◎　学級で困っていること
・ボールの使い方を話し合おう。
・雨の日の遊びを考えよう。
◎　係からお願いしたいことや係へお願いしたいこと
・係の仕事をみつけよう。
・係の発表会をしよう。
◎　工夫したりよくしたりしたいこと
・学級の歌をつくろう。
・学級文庫をつくろう。
◎　楽しみたいこと
・誕生会をしよう。
・ドッジボール大会をしよう。

さらに，出された議題がどう処理されたのか，みんなの目にふれるようにして，そのゆくえがわかるようにしておきたい。

あなたが出してくれた議題は，次のようになりました。
◎学級会に出します。
★学級文庫をつくろう。（まさき）
★ボールの使い方を考えよう。（ひろし）
☆係へまわします。
★飾りを返してください。（まゆみ）
◇先生にお願いします。
★床に机の線を引いてください。（たけし）

こうすることは，次の議題発見への意欲づけとして大切な指導となる。

3　おわりに

議題を自発的にどんどん出させる即効的な解決方法は難しいものだが，指導する教師が根気強く，以上のような手立てを積み重ねていくことによって，問題を発見する目を育てていってほしいと思う。　（研究員　武田　徹）。

中学校英語

「聞くこと」の指導について
―その基本的な考え方―

1　はじめに

今，日本の英語教育は確実に新しい方向へ進み始めようとしている。昨年１２月に教育課程審議会の答申が出され，新しい英語教育の進むべき方向が示された。そのポイントとなるのは「コミュニケーション能力の育成」であり，それを受けて，これまで一領域として扱われてきた「聞くこと，話すこと」が，それぞれ独立して「聞くこと」「話すこと」の二領域となる。このことは，今後はこの二つの領域の指導に，これまで以上に重点が置かれ，質的にも量的にも充実した指導が行われることを狙っているのである。そこで，このような情勢に対応するために，今回は，先ず「聞くこと」の指導について，どのように考えていけばよいのか少しばかり考えを述べてみたい。

2　「聞くこと」の指導の重要性

では，なぜ「聞くこと」の指導を第一に取りあげるのか。その理由として，次の二つのことをあげたい。

(1)　「聞く力」は「話す力」の基礎となる。

言語習得の理論から言って，話せるようになるまでには，「聞くこと」による莫大な量のことばのinputが必要であることがわかっている。また，通常の対話においても，話されることばの内容が聞き取れなければ，自分の考えや意見を述べることは難しい。「話す力」は「聞く力」とともに向上していくものと考えることができる。

(2)　「聞く力」は「読む力」を促進する。

英語の学習で，なぜ「音読」が大切であるかを考えてみよう。音読をすれば自分の声が

耳に聞こえてくる。その音声に注意を払いながら音読を続ければ，単語の発音はもちろんのこと，英語のリズムやイントネーションの改善にも大変効果的である。

では，「黙読」の場合はどうだろうか。黙読する時にもやはり，「無言の音声化」が行われていることがわかっている。そして，その音声化されたものを「聞く」ことで言葉を理解していると考えられる。極端な言い方をすれば，「読むこと」は文字の音声化であって，それを「聞くこと」によって，言葉が理解されていると考えることができる。

このように，「聞く力」は他の技能に大きな影響を与えており，その力を高めることは英語を学習していく上で非常に重要なことである。

3　「聞くこと」の指導とは何か？

言うまでもなく，「聞くこと」の指導とは，「聞く力」をつけさせるための指導のことである。では，「聞く力」とはどのようなものであろうか。ここでは，科学的な分析は避けて，どの程度の「聞く力」が，中学生の段階での英語学習に求められているのかを確認しておきたいと思う。

現在の学習指導要領では，「聞くこと」の目標を次のように表現している。

〔第１学年〕初歩的な英語を用いて，簡単な事柄を聞いたり（話したり）することができるようにさせる。

〔第２学年〕初歩的な英語を用いて，事柄の概要をとらえながら聞いたり（話したり）することができるようにさせる。

〔第３学年〕初歩的な英語を用いて，事柄の要点をとらえながら聞いたり（話したり）することができるようにさせる。

要約すれば，中学３年間の英語学習を終えた時点で，それまでに学習した範囲の語いや言語材料を使って話される内容を，少なくとも概要や要点は理解しながら聞くことができる力を生徒に要求しているのである。

今後の具体的な目標としては，中学３年生の授業では，教師がほとんど英語だけで授業を進めていっても，それについていけるだけの「聞く力」を生徒につけさせてやりたい。また，今後ＡＥＴとのティーム・ティーチングがますます増えていくとすれば，授業中にＡＥＴが話す「生の英語」を聞いて理解する力もつけさせる必要がある。このようなことを念頭に置いた指導が今後，大変必要になるだろう。

4　「聞くこと」の指導のための一試案

では，実際に，これから「聞くこと」の指導をどのように進めていけばよいのだろうか。今まで既に実践されてきた方法も，もちろん評価すべきであるが，さらに次のようなことを提言したい。

(1)　授業は可能な限り英語で行うこと。

生徒の「聞く力」を伸ばすためには，何と言っても多くの英語の音声に生徒の耳をさらす（expose）ことが大切である。限られた言語環境の中で英語を学習する以上，最大の言語環境である授業を有効に活用することは，非常に大切なことである。

(2)　計画的な指導を行うこと。

週３時間という限られた時間の中で，効果的な指導を行うためには，いつ，どこで，何をどのように教えるのかを事前に充分に検討し，明確にしておく必要がある。そこで，少なくとも次のことはやっておきたい。

①　年間指導計画を領域別に作成する
②　教材の適切な選択及び自主教材の作成
③　指導時間ごとの指導案の作成

(3)　段階的な指導を行うこと。

最初から程度の高い能力を期待するのは無理である。生徒の力に応じて，段階的な指導を行うことが必要である。

①　一連の音声の流れを，単語のつながりとして聞き取れるようにさせること。
②　単語と単語が集まって，ひとまとまりの意味のあるかたまりを作っていることを聞き取れるようにさせること。
③　意味のあるかたまりが集まって，意味のある文を作っていることを聞き取れるようにさせること。
④　概要や要点をとらえながら聞き取れるようにさせること。

このような分け方が最良ではないが，質的にも量的にも徐々に発展していくような方法を取ることが，生徒の力を効果的に高めていくのに適していると思う。

5　おわりに

「聞くこと」の指導のための具体的な方法については，まだまだ今後の研究課題である。より良い方法を見つけるためには，試行錯誤をくり返しながらも，実践を通して一歩ずつ進み続けることが確実であると思う。諸先生方の御意見や実践例を頂ければ幸いである。

（研究員　山下　三男）

情報教育より

ＣＡＩコースウェアの作成いついて

研修三課情報教育係ＣＡＩ教育　研究員　大　島　正　豊

1　はじめに

鳴門教育大学（当時国立教育研究所）の木村捨雄教授が，昭和４６年東京都葛飾区常磐中学校にＣＡＩを実験的に導入して以来，日本にもＣＡＩ教育が始まった。その後，茨城県つくば市竹園東小学校（筑波大学・中山和彦教授），岐阜県川島町川島小学校（岐阜大学・後藤忠彦教授）等の実験が続き，成果を上げている。

又，認知心理学を基にした新しい学習方法の試みとしてのＬｏｇｏ（ＭＩＴ・Ｓ・パパート），国立教育研究所が中心となって推進している教育情報データベース，日本教育システム等の企業が進めている在宅学習，最近流行になってきたパソコン通信と，ここ数年動きが，活発になってきている。

しかし，当初から問題になっているのは，ソフトウェアのＣＡＩコースウェアの開発である。パソコンのハードウェア，教材作成支援ソフト，パソコン言語等は大学の研究機関や業者が開発して急速に進んでいるが，ＣＡＩコースウェアの開発は教師に任され，現在開発方法の検討段階であり，教師個々の開発から組織の開発へと脱皮が望まれている。

本稿では，ＣＡＩの概略と，教師としてＣＡＩコースウェアを作成するときの留意点，開発手順の概略，及び作成内容について述べる。

2　ＣＡＩとは

パソコンの教育への利用形態は，学校事務用，理科等の実験の測定・実験整理，及び問題解決ツールとしての教具用，教授・学習設計，及び評価用としてのＣＭＩ，そして，教授・学習課程に援用するＣＡＩがある。

ＣＡＩ(Computer Assisted Instruction)はコンピュータ支援教授と訳され，生徒自らの学習を強調して，ＣＡＬ(Computer Assisted Learning)が使われることもある。

歴史的には，ハーバード大学のスキナーがＩＢＭと協力して研究を始めたのが最初であり(1958)，この当時のＣＡＩは，現在市販されているオーサリングシステム（教材作成支援ソフト）が提供する最小学習単位（フレーム）を基本としたフレーム型ＣＡＩである。これはパソコンにあらかじめ教材と教授方略を入力しておくが，この両者が固定化されており，生徒に応じて教材内容・教授方略を柔軟に変えることが出来ない。研究方向は，これ以降この問題点を克服する方向で，知的ＣＡＩ(Intelligent CAI)へと移っていく。

従来のプログラム学習との違いは，パソコンが記憶する能力を持っているため学習履歴を取れる点であり，生徒の応答状況に対して教材の内容・教授方略の変更が可能である。又，学習者が学習の主導権を取れることができる。

ＣＡＩの学習形態上の様式は，木村捨雄教授が表１に示すように数種類あるが，代表的な様式は個別教授様式である。しかし，学校現場で実際に利用する場合は，他の様式も含めて，幅の広い利用方法が求められる。

表１　ＣＡＩの学習形態上の分類

○プログラム制御様式（教えるシステム）
　(1)　訓練演習様式（ドリル＆プラクティス様式）
　(2)　コース作成者制御型・個別教授様式（チュートリアル様式）
○学習者制御様式（学ぶシステム）
　(1)　学習者制御型・個別教授様式
　(2)　問い合わせ様式
　(3)　ゲームおよびシュミレーション様式
　(4)　問題解決様式

3　ＣＡＩコースウェアの作成方法

フレーム型ＣＡＩで，個別教授様式の標準的な作成の方法を記すと次のようになる。

(1)　全般的な留意点
・　目的，目標が明確であること。
・　内容が，教授方略，パソコンの役割が適当であること。

・　開発チーム，開発手順，使用説明書が完備していること。

(2)　作成時の留意点

・　教える側の論理でなく，学ぶ側の理論を重視すること。
・　対話による学習を重視すること。
・　学習者に学習の見通しを持たせること。
・　基本的にパソコンは機械であるので，冷たくならない様に配慮すること。
・　学習の流れは集団でなく，学習者個人の状況で決定されることに注意すること。
・　教師の役割は臨機応変な個別指導であることに注意すること。

(3)　開発の手順

基本設計段階では基本的な情報を収集することが必要となるが，これは教育情報データベース，教育センター等を利用することになる。

詳細設計段階では，パソコンの利用方法を中心とした教授方略の決定，そして，それを基にフレーム詳細記述用紙に，フレーム内容を書き，台本を作成する。

この基本設計と詳細設計の内容を，ＣＡＩコースウェア設計仕様書としてまとめておく。

次に，パソコン言語（ＢＡＳＩＣ，教材作成支援ソフト等）に応じて，コーディングをし，キー入力をする。

○　ＣＡＩコースウェアの基本設計
　・開発方針の決定　・情報収集　・目標分析　・コースアウトラインの決定
○　ＣＡＩコースウェアの詳細設計
　・教授方略の決定　・学習課題の分類
　・フローチャート作成（大まかな）
　・学習変数等の決定　・画面構成
　・フローチャート作成（フレーム単位）
　・テストコースの実行と検討
　・フレーム詳細記述用紙の記入
○　コーディング
○　テストランと修正
○　使用説明書作成
○　授業実践
○　ＣＡＩコースウェアの改訂

4　どんなものを作成するか

研究機関である大学，授業実践を担当する現場教師，現職教員研修機関である教育センター，パソコンのハード・ソフトウェアを販売する業者各々には役割がある。現場教師はＣＡＩコースウェアを利用し，授業実践することが任務である。従って，まず第一に現場教師は，ＣＡＩコースウェアが自作・市販を問わず，内容を十分に検討し責任をもって使用することを要求される。そして，作成については，教材の内容・教授方略に重点を置き，ＣＡＩ理論研究に関する部分，パソコンのハードウェア及びソフトウェアのテクニックに関する部分は，他の三者に任せることが大切である。

この役割分担がないと組織としての開発ができない。前述したＣＡＩコースウェア設計仕様書，及び台本が教師の財産となる。

以下，注意すべき事項を数点あげる。

(1)　学校内の業務分析を十分して，使用目的を検討し，学校業務用として役立つこと。
(2)　使用方法が簡単で，だれでも利用出来るＣＡＩコースウェアであること。
(3)　パソコンの機器，及び市販ソフトの流行に捕らわれないこと。
(4)　教師個人の趣味で作成しないこと。

5　おわりに

詳しい利用方法，作成方法については，以下の文献を参照されたい。

(1)　「教育工学の新しい展開」第一法規1977. 8. 5
(2)　「新教育の辞典」平凡社1979. 4.23
(3)　「新しい展開を図るＣＡＩセミナー」日本科学教育学会・筑波大学学術情報処理センター1986. 8. 5
(4)　中山和彦・東原義訓「未来の教室」筑波出版会1986. 5.28.
(5)　佐伯　胖「コンピュータと教育」岩波新書1986. 2.20.
(6)　T.オシエイ,J, セルフ「人工知能による学習革命」ホルト・サンダース1984.12.12
(7)　中山和彦・木村捨雄・東原義訓「コンピュータ支援の教育システムーＣＡＩ」東京書籍1986. 3. 31
(8)　エスター.R. スタインバーグ「ＣＡＩ教材の設計」TBS 出版会1985.10.31.
(9)　S.パパート「マインドストーム」未来社1982. 1. 8.
(10)　シンシア・ソロモン「子供の学習とコンピュータ」パーソナルメディア1988.2.20.
(11)　坂元昂編「これがコンピュータ教育だ」ぎょうせい1987. 8. 2. 1

昭和６３年度
長期研修生紹介

教育センターには，現場の先生方を対象にした「長期研修」制度があります。教科・領域等の専門的研究や，教育実践上の諸問題について研修を行い，教職員としての資質向上を図っています。

今年も，緑に囲まれた閑静な環境の中に，26名の先生方を「長期研修生」として迎えました。研修期間は６か月で，すでに３名の先生方が研修を終えられ，現在は23名の先生方が研修中です。

県内各地の校種，教科，領域を異にした先生方が，教師としての指導力と識見の向上を目指し，各種の専門教養・教職教養を併行して，自分の研究テーマに基づいた研究を，理論と実践の一体化を図りながら深めておられます。本年度の「長期研修生」26名の紹介は下記の通りです。尚，中間報告会は１月９日，研修成果報告会は３月24～26日の予定です。

職名	氏名	所属校	教科・領域等	研修内容
教諭	嘉村　毅	若楠小学校	小学校国語	一人ひとりが意欲的に取り組む単元学習指導の工夫～教科書・他の資料の関連を図って～
〃	松尾浩史	浜崎　〃	〃　国語	読みを深めていくために一つ一つの言葉の意味や働きに気づかせていく指導法
〃	丸田哲士	波多津東　〃	〃　国語	言語感覚を育てる授業の創造
〃	村田達則	大草野　〃	〃　社会	地域の伝統工業の教材化と指導の工夫～大草野の陶土業の学習を通して～
〃	南里　敏	春日　〃	〃　算数	一人ひとりを生かす学習指導法の研究
〃	古賀敏正	千代田東部　〃	〃　理科	生き生きと活動する子供を育てる生活科学習へのアプローチ～自分と自然環境とのかかわりを中心にして～
〃	江頭一寛	新栄　〃	〃　理科	C区分「地球と宇宙」の時間的・空間的認識を深める理科学習指導法の工夫
〃	山田典明	久間　〃	〃　特別活動	ひとりひとりが意欲的に取り組む学級会活動の研究～係り活動を中心にして～
〃	山下　司	大川内　〃	〃　CAI教育	小学校算数科におけるパソコンの利用について～「量と測定」領域のコースウェアの開発
〃	川添智子	呼子　〃	〃　教育相談	問題行動に対する教育相談の実践的研究～親や子どもとの，よりよい関わりを求めて～
〃	豊留和則	北茂安中学校	中学校数学	個に応じた学習指導法の研究
〃	飯田勇次	西唐津　〃	〃　理科	佐賀県北西部におけるタイドプールで見られる生物の状態と主な種類の食物連鎖
〃	三浦弘明	中央　〃	〃　CAI教育	中学校理科におけるパソコンの利用――分野イオン領域のコースウェア開発～
〃	大串兼三	西部　〃	〃　CAI教育	数台のパソコンを利用する場合のコースウェア開発（図形）
〃	福間　聡	田代　〃	〃　教育相談	問題行動に対する教育相談の実践的研究～家族へのアプローチを中心として～
〃	松崎新一	城北　〃	〃　教育相談	問題行動に対する教育相談の実践的研究～思春期の心理と問題行動への対応～
〃	田中正博	佐賀東高等学校	高等学校英語	コミュニケーション能力を高め，国際理解の基礎をつちかう学習を目さして
〃	坂本明弘	厳木　〃	〃　CAI教育	高等学校数学Ⅰ「式と計算」におけるコースウェアの開発
〃	山村早百合	県立盲学校	〃　特殊教育	知恵遅れの子どもの言語発達に関する研究
〃	山口民男	伊万里養護学校	〃　特殊教育	知的発達遅滞児における視知覚訓練の実践的研究～視知覚訓練を通しての文字指導～
〃	宮地龍二	鳥栖商業高等学校	〃　情報処理	プログラム言語学習及びコンピュータを利用した「総合実践」～販売・購買情報の処理システム～
〃	峰松　昇	鹿島実業　〃	〃　情報処理	プログラム言語学習及び「情報処理Ⅱ」における教材作成～経理情報システム～
〃	城島貞実	伊万里商業　〃	〃　情報処理	プログラム言語学習及び「商業経済Ⅰ」で利用する教材作成
〃	江口保彦	伊万里農林　〃	〃　情報処理	プログラム言語学習および「林業経営」で利用する教材作成～樹幹解析について～
〃	福光幸子	牛津　〃	〃　情報処理	パーソナルコンピュータを利用した「和服の製作」の効果的指導法
〃	永渕茂子	鹿島実業　〃	〃　情報処理	被服製作（女児服）におけるパーソナルコンピュータの活用について

私のすすめる「一冊の本」

「宗教と教育の知恵」（学習研究社）

俵　谷　正　樹

多くの経典の中のことばを，今日の教育に欠けていると思われるもの，また，失われようとしているもの等にふれつつ解説してある。今日の教育に対する警鐘とも聞こえた。

花瓶の下敷きに徹せ，これが教師の生きざまだ。童子にとって最初に出会った師こそ生涯の師だ。これは，見出しの一例である。

講話等の資料として，自己研さんの書として一読をおすすめしたい。

武雄市立武雄小学校
校長　山　崎　大三郎

「教育・わたしの体験から」（朝日新聞社）

笹　沢　佐　保他79名

ＮＨＫ佐賀放送局の朝のインタビュー番組で富士町に転居された，笹沢佐保氏との対談が放送されていた。内容は教育論であったが，何か胸にグサリとくるものがあった。

この本は教育者だけでなく外野席にいる方の教育論を多数集録してあるので，教育のハウ・ツーものというよりも，どう生きていくのかに関するものが目立つ。しかしもっと楽しいことは８０人の方と出会いができることだ。

多久市立東部中学校
校長　力　武　悦治郎

「知罰・徳罰・体罰」（明治図書）

森　　隆　夫

この変転極まりない時代に教師のありようとして“自己改革”とか“自己教育”とかいわれるが，言葉でいうほど容易なことではない。

本書はその難しさを少しでもやわらげ，教育改革を自分で手がける第一歩に役立ててよいように思う。知・徳・体といいながら，現実には体罰だけというのでは教育自体を問われることになり，本書の標題でいう罰の発想に触れることも自らをふり返るよき機会ではなかろうか。

唐津市立第五中学校
校長　平　松　清　資

「国際化時代の日本農業」（農山漁村文化協会）

今　村　奈良臣

牛肉・オレンジの輸入自由化に加え，主食である米までも自由化を迫られるという，厳しい国際情勢の中で，私共も腰の強い活力と魅力に富む農業教育をどう築くかを模索しています。

本書は，著者が「国際化時代における日本農業の課題」などをテーマに，講演や報告の記録を再構成し，体系的に整理されたものです。

わが国の農業を一人でも多くの方々に御理解頂きたいと思いお薦めします。

佐賀県立佐賀農芸高等学校
校長　今　泉　正　己

教育実践研究のヒント
「研究資料のお知らせ」の活用を……

８月末日現在，当センターに保管されている教育資料（研究紀要，専門図書）は，次のようになっています。

・研究紀要……12,588冊
・教育専門図書……8,428冊

質量共に充実してきており，先生方の研究，実践のお役に立つものと思います。一層のご活用をお願いします。

さて，これら教育資料の今年度利用状況を，利用冊数の面で調べてみると，専門図書338冊，研究紀要1,042冊，雑誌126冊，教科書752冊，合計2,258冊となります。かなり資料が活用されたことになりますが，まだまだ十分な利用状況とは言えません。

当センターでは，新しく入手した研究紀要について，年間３回の「研究資料のお知らせ」を通してその内容の紹介をしています。参照いただいて，必要な資料の提供を係に申し出てください。レファレンス・サービスも実施しています。館内閲覧は自由にしておりますので，終日調査研究の目的で入館されても結構です。

（教育資料係）